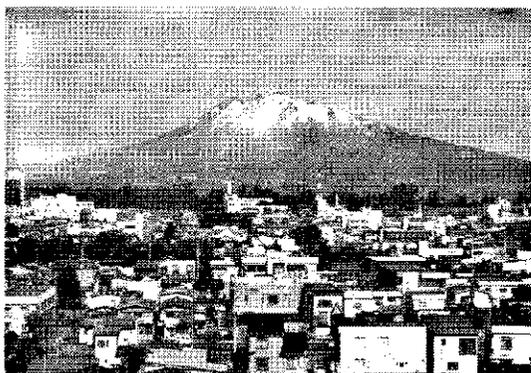


吹春 俊光

toshimitsu fukiharu

## 弘前にて

1999年の5月22日、23日に弘前で菌学会が開催された。岩木山には残雪がのこり、空港近くのリンゴ園は花盛り、弘前公園はツツジの花盛りだった。ホタテが非常にうまいことも発見した。今まで偏見で、ホタテは身が柔らかいべったりしたしょうがないものと思こんでいた。私の故郷では、有明海でとれるタイラギの貝柱が多量に出回っており、小ぶりでも身がしまっているタイラギの貝柱が数等うまいと思こんでいたのである。今回、北の地でホタテを食べ認識を新たにしました。



弘前市内から見た岩木山(1999/5/22)

閑話休題。菌学会は中規模な学会で、会員1600人位、毎年の学会参加者は200~300人、演者は100人前後、それぞれ15分程度の口頭発表をおこない、それぞれの新知見を披露しあう。まじめに講演を聞くことも、もちろん重要だが、会場で情報をひろうことも重要である。別刷り、と称する自分の仕事を書いた、いわゆる論文を持ってきている人もいたので、それをもってあるくのも、楽しみのひとつである。学会は情報交換の場なのである。

## 会場で頂いた別刷りの中から

「九州産ハラタケ型きのこ類知見」という、一見フロラの報告のようにみえる論文のなかに、シャイな根田さん(森林総研、九州支所)



根田仁先生(森林総研)1990/10/6

はいくつかの驚くべき情報を盛り込んでいる。(根田その1)ハツタケの正名は *Lactarius lividatus* Berk. & Curt. in Proc. Am. Acad. Arts Sci., 4: 119, 1860 であるとするもの。これまでの図鑑には *Lactarius hatsutake* Tanaka in Bot. Mag. Tokyo, 4: 393, 1890 が採用されてきた。1855年 Charles Wright によって奄美大島で採集され *lividatus* の名がつけられた種はまぎれもないハツタケであろうという内容。今回の講演でもこのことにおふれておられたが、発表のあとで長沢大先生が、なんとか *hatsutake* の学名がのこるようなルールを探して残して下さいとコメント、さてどうなるのか。(根田その2)また日本で *Lentinus tigrinus* の学名があてられケガワタケと称されているもの(今関・本郷、1987)は *Lentinus squarrosulus* Mont. in Ann. Sci. Nat. Bot. ser. 2, 18: 21, 1842, であるという話。なんでも *L. tigrinus* に特徴的な「鋸歯状のヒダの縁」、「虎の毛皮状にみえる柄の表面のリン片」などが、日本でケガワタケと称している種では顕著でない故。(根田その3)アオキに発生する *Marasmius aucubae* Neda アオキオチバタケ、*Chaetocalaths ehretiae* Neda などの新種の記載。また今回の講演要旨のなかでは、*Chaetocalaths galeatus* (Berk. & Curt.) Singer (和名無し)が日本に産するとも紹介がある。(根田その4) *Tactella patellaris*

(Fr.) Murr. が記載されている。本種はニセシジミタケ(仮称)として山溪フィールドブックスに(おそらく長沢先生同定による)紹介があるが、線画入りの紹介は初めてではないか。本種はブナ林に発生する材上性キシメジ科のきのこで、子実体はシジミタケ状、幼菌の時には何とヒトクチャタケのような被膜をもつという珍菌である。あともうひとつ、(根田その5)トキイロヒラタケの学名が *Pleurotus sarmonostramineus* ではなくて *Pleurotus djamor* (Fr.) Boedijn であるというもの。このこ



左から横山龍夫先生(故)、津田盛也先生、成田伝蔵先生(故)、1人あいて豊石行先生(1986/6/1の弘前で菌学会より)

とは昔の菌学会で報告されて以来、根田さんの持論だったが、これが活字になっている。ああ、なんと盛りだくさんな論文なんだ。でも図版をよく見るとニセシジミタケの緑シスチジアの図版番号Hが抜けていたり、写真図版1のA~Dの記号が全部抜けていたり、でもそんなことは全然気にしない大先生である根田・土居共著の面目躍如の論文である。というものの、本当ならいくつかにわけて菌学会の雑誌に出してほしかった。

長沢栄史大先生(日本きのこセンター菌蕈研究所)からもいただいた。日本産ハラタケ目菌類目録II。ベニタケ亜目。36頁の大著、先のイグチの目録の続編、その中でキハツタケの学名を *Lactarius flavidulus* Imai in Bot. Mag., Tokyo 49: 604. のかわりに *Lactarius tottoriensis* Matsuura をつかいませんかという提案。なんでも前者の学名は1935年9月20日出版、後者の学名は1934年1月10日出版で、後者が早いという内容。当時の命名規約を考慮すると、日本語の記載でも有効と認められるのだそうで、松浦勇さんの学名を使いましょうという内容。この目録の文献の調べ方はマニアックで、ちゃんと橋屋さんの学会の講演要旨まで(1)引用してある徹底ぶりである。長沢先生ら

しい。

工藤伸一さん(青森県きのこ会)からもいただいた。ヤナギと関連して発生する *Tricholoma cingulata* (Almfelt ex Fr.: Fr.) Jacobsh が北海道と青森からも見つかかり、ツバササクレシメジという和名を提案されておられる。工藤さんは青森県で精力的にきのこを調べておられ、マニア必携の書と言う人もいる「青森のきのこ」の筆頭執筆者でもある。

京都の大学院生の小田貴志君はテングタケ属の分類を分子の情報で再検討をした論文をくれた(Oda et. al., 1999)。形のカatalogがかなりつくられているテングタケ属に分子の手法をもちこんだのが成功の鍵だったようだ。かなりの成果が盛り込まれている。まだ詳しく読んでないが、たとえば図を見ると、これまでテングタケ属を亜属にわけるときに、小ヒダの有無、アミロイド・非アミロイドで分けていたが、分子の結果がこれを支持すること、タマゴタケを、黄・茶・赤で亜種にわけていたが、分子の情報の距離だと種が異なるくらい離れていること(別種の可能性があるということ)、がっちりしたテングタケ(針葉樹にできるタイプ)はベニテングタケとほとんど(分子情報では)同種であるらしいこと、など



突然変異の白いナメコを手に驚く田中千尋先生(1999/5/23)

のビックリの結果が山のように出ている。これまで種、節、などを分けるキイが、感想文のような分けかたでいらだちがあったが、この分子の結果は明快である。「形でみてようわからんものも、分子でみるとはっきりした違いが出れば、安心して新種扱いできる」というような言い方をしていた。これからの新種記載には、形態分類を分子の手法が支援するようなかたちになるにちがいない。

#### 会場展示のなかから

植物病理学の研究室主催だけあって、リングのモニリア病の菌核から発生した *Monilinia mali* の子実体を展示してあったほか、きのこ王国青森の、栽培業者の方達による栽培きのこがたくさん並べてある。ムキタケ、マイタ

ケやナラタケのいくつかの生物学的種の栽培展示のほか、白いナメコの展示もあった。驚いたことに、子実体が白くなったナメコは、その胞子までも白く、傘のヌメリも少ない、ということだった。きのこ形態分類形質の最重要形質として、胞子の色、傘の表面の細胞配列構造、などがあげられているが、なんたることだ、と一緒に顕微鏡を覗いた田中千尋氏と絶句した。

#### 講演の中かから

発表の日、地元の写真家手塚豊さんが発見した新種のきのことして地元紙の一面トップを飾り、日本産テングタケ属3新種についてということで、工藤伸一・長沢栄史の名で発表があった。はやく論文になったのを見たい。吉見先生も新産種5種を報告されておられた。茨城大学の小野先生のところでもホウライタケの新産種 *Marasmius fulvoferrugineus* の報告があった。筑波大学はサビ菌ばかりじゃないらしい。

それぞれの方が、数年、あるいは10年以上も調べた結果、あるいは数日で出した結果が100題以上も紹介される菌学会大会、金さえ払えばだれでも参加できます。この原稿が印刷になるころの大会は近畿大学、奈良キャンパスでの開催である。

#### 参考文献

- ・工藤伸一・長沢栄史 1998. 日本新産種 *Tricholoma cingulata* (ツバササクレシメジ 新称) について. Rep. Tottori Mycol. Inst. 36: 16-20.
- ・Nagasawa, E. 1998. A preliminary checklist of the Japanese Agaricales. II. The suborder Russulineae. Rep. Tottori Mycol. Inst. 36: 36-71.
- ・Neda, H. and Doi, Y. 1998. Notes on *Agaricus* in Kyushu District. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo 31: 89-95.
- ・Oda, T., Tanaka, C. and Tsuda, M. 1999. Molecular phylogeny of Japanese *Amanita* species based on nucleotide sequences of the internal transcribed spacer region nuclear ribosomal DNA. Mycoscience 40: 57-64.
- ・日本菌学会第43回大会講演要旨集. 1999. 日本菌学会第43回大会実行委員会編 73pp. 弘前大学, 弘前.